

て一切を虚偽と断定し他は高級の階段に達すべき準備を其中に認めて相對的真理ありとなすものなり。そはミルトンの失樂園に於ける異教徒の神觀とウォーヅウオースの「遠征第四卷」に於ける異教徒の神觀の對比にも似たらむか。近代の歴史研究法の傾向と世界の聖典に關する知識の増進とはアレキサンドリヤ派ウオーヅウオース派の見地に加擔するものなり。ウェーゲ、アグエスタアツカヂヤの詩篇又は埃及の埋葬式文を讀む者誰れか眞宗教の眞根柢を其中に認めざるべき。されば基督教の眞理を辯護せむとて基督教以前の信經を一切虚偽と彈呵し去る舊式の辯證論は吾人に取りて既に奮套の見となりぬ。今日猶世界の那邊に於てか是種見界の餘滓殘れるが如しと雖もそは既に不通の思想なるを記せざるべからず。そは單に疑ひ得ざる歴史事實と矛盾するのみならず猶又自殺論法に陥りつゝあるものなり。特種天啓の價値を廓大ならしめむと欲して自然宗教を否定し了らば特種天啓の根柢を何處にか求むべき。特種天啓は自然宗教を基點として初めて成立し得べきものなるに非ずや。是れ建築の上層を軒擧せむと欲して基礎を撤回するものに非ずや。さもあらばあれ一切の反動は動もすれば極端に

趨り易し。現代思潮の危険は宗教生命に進化の連絡ありとの原理に拘して淺薄なる進化説に安住するの弊に陥る點にあり。疑もなく宗教史上には進化ありき。されど其進化たるしか感ずるは易く如何にしてこの質問に定義を下すに難き底の進化たり。最初に曰へるが如く進化の出發點に關して既に諸學者間區々の學說を異にす。又進化課程の究極目標に就きても然り。無神論者有神論者基督教徒等何れも宗教の終極に就きて各自個別の主張を有するが故に進化の目標も自ら一様なる能はず。又諸多の系統を比較對照せしめて何れが最初に發生せるかを決定する上に重且つ大なる關係ある諸學說現出の年代を詳にする能はず。恐らくは是點は永久に不確實なるべし。又退化課程は如何程までの結果を及ぼせるかを明細になすは全然不可能事なれば是方面には猶未解決の疑問夥多あるべし。以上の諸點を考査すれば寬濶茫漠たる宗教進化論の一般原理を採用する上に多大の斟酌をなさざるべからざるを認む。更らに重大なる點は所謂個人的宗教と神學との區別を嚴守することなり。吾人は動もすれば論證の輿料なるの故を以て初代宗教上の所謂外部的要素なるものを過重するの弊に陥り易し。其

理由とする所は文學儀式民話の中に於て古來尊重せられたればこそ今日猶遺存して吾人の手に傳はりたるなれと曰ふにあるが如し。之に反して個人的宗教なるものは何等の記録をも伴はずして湮滅し了りぬ。かのイスラエルの王國中バール神の禮拜に反對せる者七千人ありし間に一人と雖もエリヤの眼に觸れたるものはなかりき。是は以て他の範とすべき事實なり。淫靡腐爛せし羅馬にも猶度神の家庭ありき。教會の暗黒時代と號せる九世紀十世紀の間にも猶基督教の生命は滅せざりき。宗教史を通じて是くの如き實例は猶隨時隨處に發見し得べし。吾人は無學なる貧民窟の中に最素朴的最貧弱なる神學思想を抱きながら而も全生全心を支配し慰藉し醇化する一味温暢なる宗教を有するものあるを見る。又最高の教育あり文雅なる社會に生息する信仰家にして自家信仰の對境を描出する用語の不充分なるを痛嘆するものあるを知る。是くの如く個人的宗教の極致は常に神秘主義に埋没するの傾向あり。遂に各人各自の宗教は言辭に詮表し盡くすを得ざる靈交接神の感に於て高潮するを知るべし。是種の感れたる實驗の強さ深さ又そが生涯を動かす比量を參照して初めて眞宗教の活力を評價し得

べし。加ふるに靈的生命の復興は屢陳套なる古人の文辭を其儘襲ぎて詮表せらるゝが故に冷やかなる歴史家の批評眼には退化なり錯誤なりと様に映すること多し。宗教の二要素中論證の主材たり得べきものは外部事實なり。神話と儀式と遺存物となり。生涯の活元頭たる内部の匿れたる力には非ず。是に於てか宗教の進化の性質及び特徴の概則を掲ぐるは至難事とならざるを得ず。吾人は過去の宗教の知的方面のみを知りて靈的方面を知らざるに天啓の與へらるゝや唯だ靈性上に與へらるゝのみ。由來個々の人種は各自固有の頭腦と思想とを有するを以て其宗教も亦特殊の思想を以て詮表せられざるを得ず。然れども是種の思想は通俗的の實踐に於て多大の變化を受けたり。而して宗教現象を研究する者多くは思想の變遷を偏重して其間不變性の存するを忘るゝものゝ如し。只だ儀式的方面に至りては全世界を通じて殆んど齊一にして宗教改革信經改正解釋移動等を歷程したる後猶依然として舊態を失はず。然りと雖も變遷多かりし思想の方面も變動少かりし儀式的方面も何れも内部經驗たる希望恐怖に無關係なること多かりき。然るに是內的經驗は人類の生死を支配せし魔力なりしなり。

之を要するに今の處宗教科學の發見し得たる所は只一部の破片的現象に過ぎず。加ふるに既に發見せる現象に付きて下したる概論も悉く假定にして試驗的なり。されば是を大前提として結論を演繹せむと欲する者は深甚なる注意を拂はざるべからず。

第七章 基督前の歴史記録に表れたる宗教

原始的宗教を臆説の上に築造することを廢し歴史の記録上に現れたる主なる宗教を研究するに其主材は拾集するに易く其信仰も亦太甚しく畸形なるものには非らず。世界の諸民族が歴史記録の上に表れ来るや既に業にそは一定の宗教を抱懐し居たりき。元より人種及び郷土を別にするに従つて各自の特性は一様ならざりしと雖も思想の形式禮拜の方法に少からぬ共通點ありしは争ひ難し。而して何れの宗教も皆破壊と擁護と迫害と俗化墮落と徒黨分裂と曲解誤傳と異端の攻撃とを逃へざるを得ざりしと雖も而も剛健不拔の活力に支へられて持續保全の効果を全うせるは如何に宗教が人類須要の因素なるかを示して餘りあり。

人類は如何なる運命に陥るも敢て宗教を擲棄することなかりしなり。宗教が普遍的事實なるは既に曰へる如し。而して是は宗教が眞理に基因するを想定す可き辯明と見るを得べし。然りと雖も地上に顯れたる程の宗教てよ宗教は其何れの宗教たるを論せず皆天上に反映ありて天上より靈感を受けたるもの

と許すに非ずんば如是辯明の價值は著しく削減し來らん。故に他の宗教一切を貶黜して専ら一宗教の天啓を過重するは却つて該宗教の根底を危からしむる所以なり。世界の諸多宗教に何等のインスピレーションなかりしと断定せば爾餘の宗教も亦インスピレーションなかりしとの強き臆測を生ぜざるを得ず。諸多の宗教は全體として密切なる關係あり。其一を探りて他を棄て甲を利せんが爲に乙を無視するが如き態度に出づるを許さず。洵に下級の宗教は高級の宗教に到達する階梯たるなり。かるが故に人類全部に普遍なりしインスピレーションの信仰を一度迷妄なりとして排擠する以上は論理上吾人は除外例を設くる權利なきなり。勿論インスピレーション若くは天啓には明かに程度上の等差ありしなり。そは今日流布する進化論に據るも見易き道理なり。然るにノスタック派はインスピレーションの等差と進化思想とを認めざりし故舊約聖書の説明に於て困難を感ぜざるを得ざりき。彼等は舊約時代の道德並びに幼稚なる人視觀的言辭を新約式の最高標準に照らして判定したる結果全然舊約書を排擠せざるを得ざりき。是態度の謬妄を觀破したるもの古代に於て既にオリヂンあり。彼は簡墨

零語の中に希伯來民族の天啓が相對的階次的意義を有するを道破したる嚆矢なり。而して希伯來民族の天啓にして既に然らば他の民族の天啓も亦然らざるを得ず。否な個人の靈的發達に於ても亦然らざるを得ざるなり。個人の靈的發達も亦階次的進化を歷程して順次完璧の境に近づくものなり。既に曰へる如く品性と行爲との修養を積むに非んば靈的洞察力を進捗せしむる能はず。宗教上の最高傳説によりて醇化せられたる神學若くは倫理學の如き外部的機縁に接觸しつゝあるものすら猶且つ屢靈眼を廓清し得ざることなきに非ず。果して然らば神の人格を多神教の言語により神の遍滿を汎神教的言辭により神の聖善を二元説の言語を以て詮表する外に神を思惟し得ざりし時代若くは如上の言辭すら猶且つ高遠に失したる太古に於て神の自啓が階次的破片的なりしは元より當然の理のみ。而して個人に就きて定言し得る所は個人の擴大たる家族部落種族國民人種に就きても同様に定言し得べきなり。

然らば吾人は先天的に宗教の存する所必ずやインスピレーション若くは天啓の賦彩の附著するを期待し得べし。而も一方に於ては是等の賦彩を以て不動的に固

定劃なりとは期待するを得ざるなり。而して是を歴史上の事實に徴するに當りて是等消極的並びに積極的期待は遂に吾人を欺かざりしを知るべし。歴史の提供する活畫幀は紛然錯然として幾流の解釋を容れ得べく又細目に亘る知識が増進すればする程一般の特性は不明の雲霧中に没し去らむ。さればこそ天啓の舉證を歴史の特定事實中に跡溯したる或人々は痛嘆して曰く。何れの通路より入るも行先は退塞せられ何れの導線に追隨するも中途にして切斷せられ吾人は遂に目的地に達するを得ずして五里霧中に彷徨す。何れの方面にも神を求めし人々の經營と苦心との痕跡は歴然たれど神が人を求め神が人に發見せられたる證跡に接せずと。然りと雖も皮相なる歴史觀の精透を獲たる例は殆んど有るなし。殊に靈界の事件に關しては特に然り。個別なる事變が神を顯はさざるは個別なる原子が神を顯はざるが如く抽象的歴史觀によりて神を知り得ざるは抽象的物質によりて神を知り得ざるが如きのみ。只だ熟慮深省する者は當初の絶望程に事態は悲觀すべきものにあらざるを知るべし。

最初に曰ふべきは宗教が人類を捉へたることなり。宗教が人類を握れること

なり。原始人に關連して吾人は既に是點に論及しぬ。されど原始人ならぬ者に於ても同様なり。例せば印度波斯やピロン埃及の儀式制度は是れが舉證をなすものなり。元より是等は明白に人的基源に發生し繁文縟禮の弊に流れたる形跡あるも其背景には常に人的以上の一物ありき。人類以外の能力秩序權威等を不明瞭ながら眞實認定して是を彼等が解し得る言辭中に詮表せんとその努力柄乎として疑ふべからざるものあり。吾人動もすれば世界の宗教律法書の餘りに宏卷蕪雜なるに驚倒して是を閱讀するの氣力を失ふことあれど其尤大なるはそれを表象として顯れたる神の司配の普遍性を證するものに非ずして何ぞや。其は無限數の法規を列舉して神に對する義務の無限性を發表せむとせし努力に非ずして何ぞや。

次に世界の宗教文學中に於ける所謂内部的證明なるものあり。即ち文學史上に顯れたる知的啓發、高遠なる道德教訓、靈的洞察力の光輝等は是れなり。誠にそれは粘土の土層中に潜める寶石の如く砂礫の堆積中に埋もれたる黄金の如く稀れなるなり。されど稀れなりと雖も其存するは疑を容れず。其平凡杜撰時として

醜劣なる關係文より引き抜きて單獨に専ら是種類のもののみを蒐集し以て讀者の眼前に提出せらるゝ時は餘りに誇大視せられんとする危険あらむ。元よりかくすればとて信仰上の素養なき人々にはそがインスピレーションを受けたる證明とはなり得ずして只だ自發的自然的理性の聲のみと彈呵せられ了らむ。而も是は比較的人的と思はるゝ信條と明白に神的基源より發生せる信條との兩極を繋ぎ以て宗教の普遍性と究極的統一性を明白ならしめ同一の神靈が未熟成熟の何れの時代にも遍滿するを暗示する楔子なるなり。

加之神は何等かの方法によりて人類と交通し給ふとの信仰は深く且汎き思想なりき。下は素朴的思想の下に多神を信せし野蠻人種より上は至聖なる神と合一せりと意識せし聖徒に至る迄人類は凡べて如是宗教的關係を眞摯に信じ來りぬ。彼等は自己が神と連結したりと觀じたるのみならず神も亦何等かの方法によりて自己と連合し給へりと信じぬ。而して其結果當然インスピレーションと天啓とを認めたるなり。件の交通の機關となりしものは元より一ならずき。或時は國君或時は聖徒或時は詩人或時は隱者或時は豫言者或時は祭司等の別ありし

と雖も何れにありても神と人との間に交通ありしと信じたるは事實にして是信仰によりて彼等は力ある影響を人生に貽し得たりき。勿論是信仰を幻覺と號して彈呵し去る者なきに非ず、かの詐譎的遺著の所爲なりとなす者の如きは時代思潮に通せざるもの、言のみ。されど吾人にして是信仰の能力と普汎性とを知るの多きに至らば吾人の合理性と精神構造との全部を疑はざる限りは吾人は是れが確實性を認めざるを得ざるなり。然るに吾人の精神構造を信せずば吾人は一切を不合理として虛無の世界に立ち籠らざるを得ず。而して是極端なる懷疑を拒斥せば該信仰は俄然復活し來らざるを得ず。該信仰が幾千萬年の間人類を支配したる所以は無數無限の人類によりて其堅實性を檢證せられたるが故に非ずや。記せよ、宗教上の傳説を確信せるものは青年に非ずして老人なりしを。彼等は終生の内的實驗より安立の地を得自家體現の眞理によりて本文を註せる人々なりき。是種の確信が如何に價値あるかは吾人が茲に提供する證明によりてのみ判定すべきに非ず。歴史家の描出し得ざる内密隠秘なる靈的事實の存在することをも合せ考へざるべからず。眞に舉證の實力を構成せしものは靈的事

實を握れる人々の心情及び良心に於ける靈的因素なりしなり。其半平不拔なる信念の面目を撲ちし色彩なり姿態なり輪光なりしなり。然らば人類が天啓若しくはインスピレーションを上より受けて神と不斷の交通せりと信じたるは原始時代以來是信念の恒常不變なりしこの事實の外に個人的隱秘的靈的實驗を根據とする堅實不可拔の舉證を得たるものなり。

かくの如く世界の宗教史を研究する者は人類に天啓若しくはインスピレーションありしこの確信を抱かざるべからず。是確信は解析に難しと雖も之を否定せむとする者は遂に言を左右に托するか若しくは極りなき難問を遣へざるを得ざるのみならず事實其ものを到底否定し得ざるなり。是確信は實際上世界に遍通し時代處方を異にするも其形式は怪しくも酷似し勁く深く人類を把握し廣く人文史を可配し來りぬ。而して是くの如く洪大なる結果を産み出したる原因は到底無なる能はず。無ならずんば則ち神ならざるを得ず。而して神の活動は吾人が期待する程には歴然たらざりき。又吾人の期待以上に遲滞勝ちなりき。而も是くの如き活動法は却つて神の活動に相應はしき方法なるのみ。

以上は異教徒の宗教史によりて論究せる斷案なれど異教徒の宗教は孤立介在する者に非ず。是と連絡あり是を完成する猶太の宗教に須つ所なかるべからず。希伯來の聖書は思想並に形式上他の宗教文學と無數の類似點あるを以て世界の宗教文學と關聯し其缺くべからざる一要素をなすものならざるべからず。而して舊約聖書の宗教上に與ふる貢獻の中最勝に算すべきものはそが一切低級の信仰形式を解釋する上に大なる光明を投ずるの點にあり。一方に於てかくの如く舊約聖書は世界の宗教文學の意義と歸趣とを分明ならしむると共に一方に於ては他の宗教文學と對照せらるゝによりて自家信經の發達課程を明裁ならしめて以て真理の共通要素を闡明し宗教そのものゝ根柢を堅實ならしむるものなり。曰ふまでもなく吾人が古代世界の宗教文學に精通すること深ければ深き丈け舊約聖書が無比の勝地を獨占するものなるを知らむ。古も今もそは限りなく群を抜き精を萃め嶄然頭角を露すものなり。而して是くの如き見界は吾人の專斷に據るものに非ず公平なる學者の一樣に認容する所なるのみ。

舊約聖書の要素は之を二大別するを得べし。一は預言的一は祭司的是なり。而

して舊約聖書の特徴然り無比の特徴をなすものは前者なり。後者は他の宗教文學に顯れたるものと著しく類似すれど預言的要素に至りては希伯來の宗教否なる理由として最強なるもの、中に算へられ來りぬ。

希伯來の預言には二方面あり。其究極的方面と一時的方面と是れなり。究極的方面とは預言を全部として觀察するに神子受肉の預備をなせる點にあり。實に舊約聖書が初代教會以來今日に至るまで無限に尊重せられ來りたる所以は是點に存す。蓋し近代の趨勢は個々の預言者が見たる幻影の範圍を制限すと雖も其制限の必要を認めれば認むる程倍々彼等が攝理の支配下に活動せしとの確信愈加はり來らざるを得ず。されど是方面が基督教徒の信仰と關連して目下の問題に接觸するは間接的なり。而して其一時的方面に至りては則ち然らず。そは神來の靈感を直接に示證するを以て神の人格と端的の關係を有す。是點に關して近代の思潮は多少吾人の見界を變動せしめざるには非るも而もそは破壊的に進まずして建設的に向へる變動なりき。是變動は自然界に於ける終極論若くは意

匠論の態度の變動に似たり。否な歴史上に於ける意匠論は自然界に於ける意匠論の系なり冕冠なり、されば前者の變動は後者の變動の一部なるなり。

自然界に於ける意匠論の變動に就きては吾人既に之を論じぬ。當初自然界に意匠を認めたるは世界一切物は何れも一定の終極目的を有し、運命によりて特種の計畫若くは官能に隸屬すべく造られ自己以外の目的を具有すと様に觀せられぬ。是は所謂機械的終極論なり世界を一個の機械と觀する終極論なり。されど是理論には不備の點あり、不備の理論は常に一半の虚偽を含む。さればれも亦現代の有機的終極論を開展せしむる階段に於て避け難き課程なりしを失はす。

今日吾人の有する自然觀は一段の完備と充實とを添へ來りぬ。吾人は事物を觀るに第一義に於て自己の目的を有し各機關は自己の存在を保全持續せしむるために存在し、第二義には生命が追隨する不窮圓周上そは他の全部に關係する大目的を圓現しつゝ趨るものなりと觀す。

往時希伯來の預言を論ずる者狹義の意匠論に據れる者多かりき。曰く。預言者

の靈感に接したるは未來の事變を預告するがためなりき。未來の預告は預言者の終極目的と觀すべく預告の實現は靈感を受けたる證明と見るべしと。されど批評學の進歩は預言者の政治的社會的預告の實現せられたる事例の如何に妙きかを指摘して其見地を一變せしめぬ。更らに進んで過去に於ける預告の實現は記録の年代如何によりて眞價を決定すべきものなれば年代の全然不明なるか又は疑はしき場合には論證上提出せらるべき資格なしとの注意を與へぬ。是批評は預言者を一層精査するの必要を感せしめ彼等の事業及び品性に對する深酷の洞察力を助長せり。かくて今日吾人は預言者第一義の使命が其當代に存せしを認め得たり。彼は其時代の人々に向ひて正義を宣傳する教師なりき。彼をして存在の意義あらしめし充足原因は其地其時代に存せりき。而も正義を説くには諸多の方法あり。希伯來預言者の特長は正義を以て道德的並びに物質的宇宙の創造主たる全能の一人格の意志なりと觀じたる點にありき。されば彼等は早晚物質界の中に正義の自ら顯現し來り物質界を自己の所領となし可見的の勝利を博すべしと確信したる點にありき。

かくの如くして彼等の道德法に對する洞察力は彼等をして大なる預告をなすの力を捕捉せしめぬ。そは恰も物理法則に於ける洞察力が科學者をして預告するの力を捕捉せしめたると同じかりき。是種の預告は歴史上の時代季節人物事變等の瑣事細目に關する預告と異なる。而して後者及び是れに關する無數の論證に就きては目下吾人は何等の批判をなすものに非ず。何となればその如き預告がよし悉く眞なりしとするも論理上檢證の方法もなきを以て尙も吾人の理論を益せず。又屢誤謬に陥りしとするも預言者も人類なり過失なき能はず。されば彼等も亦人性に普遍なる弱點を例證するものに外ならざればなり。只是際愈明白にして疑ひ得ざるとは彼等の中心思想即ち世界に於ける正義の勝利は必至的のものなりとの思想が超人的起源より發生したりとの一事なり。是は彼等の不朽なる預言なりき。その圓成了々たる實現は如何に遠き未來にありとするもその破片的實現は各時代に在りしに非ずや。故に彼等は時代の人々に説きたるが如く又未來に對しても預告しつゝありしなり。彼等の第一義は説教にありき第二義は預言にありき。何となれば彼等の宣傳せる法則は世界の終末まで活動すべ

き逕路なりければなり。是意義に於ての預告の實現は多數の人に取れて一名辭も却りて吾人は事物の靈的中心に衝き入り宇宙を動かす能力の現前に立てりとの確信を與へられたるなり。猶ほ又此くの如き預言者觀は或人々の想像するが如く新奇なるものに非ず。そは基督教會の常に把持し來れる所謂神秘的解釋と同一原理の上に立てり。純正に神秘的解釋を活用せるものを見るに神秘的解釋とは詩的空想の遊戯をなすにも非ず歴史又は預言中に事實上包擁せられざる意義を專斷的に讀入することにも非ず。是解釋の根底は一切の靈的發言若くは靈的周圍の中に現れたる事變は不朽法則の顯現なり隨て該法則の是後起るべき活動様狀の象徴となり記載となると觀じ得との原理の上により蓋し歴史は開展するに隨ひて、其複雜性に於ても其範圍の上に於ても濃厚となる。其後來の轉像は初期の轉像の指示するに過ぎざりしものを充實圓現す。是意義に於て前者は模型なり後者は實在なり。

されど是解釋法は原理に於ては眞理なれど此原理を過大視したる多數人は史上

の事實を正解する明察を失ひぬ。預言の文字上の實現と其神秘的實現との間に存する區別を忘るゝに至りぬ。其靈的圓現てふ思想に埋頭して史上無數の失敗ありしを閑却するに至りぬ。預言者輩は無瑕瑾の神託を傳ふる者と觀せられたるを以て眞の人性を褫奪せられたんぬ。而も彼等にして存在の意義ありし所以は正しく彼等が眞の人性を備へたりし點に存す。彼等が其宣傳したる靈的眞理を實際上に適用するに當りて凡人の如く蹉跎し躓倒する迄には至らざりしも而も多少岐路に迷はざりしにはあらず。彼等も亦一切他人種の宗教的先覺者と酷似せりき。彼等は人にして機械にてはあらず。而して彼等の内に在りし共通の人性は彼等の除外例的特徴に反映して愈是を鮮明ならしめたり。彼等も吾人と同様の情慾ありしものにて畢竟人類連鎖の環輪たりしなり。但だ彼等にありては神と交通せりとの確信其絶頂に達し其圓滿なる發現を得たりしなり。是交通の結果彼等は金剛不退轉底の確信を以て神の聖善と統一とを宣傳せり。「エホバかく曰給ふ」は彼れが不斷の慣用呼號なりき。換言すれば彼等は自らインスピレーションを受けたりと信じたるなり。

更らに進みて彼等は自己のインスピレーションを認め是を同胞に傳ふるの必要を感じ是を以て自家の使命なり運命なり召喚なりと信じぬ。而して彼等は最初に自己の同胞を他の民族と離隔せしめ然る後彼等特有の真理を萬民に宣傳したり。是方法により彼等は徹頭徹尾一宗教の浸潤せる文學を作り一宗教が最後に世界を風靡するならむと確信せし一國民を組織したりき。而して一宗教の思想を究盡すればそれが最後の勝利を博すべきは必然の結果なり。斯くの如くして希伯來の預言者輩は世界歴史上獨特の地位を占めたり。彼等の存在と彼等の直接の事業とは如何なる論議上の批判を受くるも動搖することなし。彼等は人類最大の地位にあり。既に論じたる如く全人類は人格的多神を信じ是れと交通の可能なるを信せんとする傾向を有したりき。而して其交通の高度なるものは只だ少数者に限らるべしとは何れの民族も共に認容する所なりき。同時に其等少数者は諸種の程度に於て自家の實驗を告白し其傳説を後世に貽しぬ。而して希伯來の預言者輩は是等の少数者の群を抜くこと數等なりと雖も而も遂に是群に伍すべきものなりき。こは人格神の信仰に對して彼等の提供する

證明を商量する際吾人の忘るべからざることなり。彼等の實驗は如何程異例なりしとすも而も人類の期待し隨時隨處に於て人類の渴望せし種類に屬す。其背景には全人類の本能あり。本能は是實驗の眞實性を保證し是實驗は逆に本能の堅實性を擔保す。夫の預言者輩はインスピレーションを受けたりと主張し彼等の確信は彼等を通じて神の語り給ふ聲なりと告白す。而して如是情態下にありて彼等は人類本然の共有性を蟬脱し得ざりき。彼等は自己の運命の絶大なるに想著するとき運疑し赧顔し失心し遁走し悶絶す。而も彼等一度口を開くや靜平沈痛血證底の權威を以て語る。彼等は私利を念頭に置かず。彼等は自家の天職によりて失ふ所はあるも利する所銖錙の微もあらず。彼等は靜平なり。彼等には病的の狂想、狂的の昂奮あるなし。彼等は其本性上凱歌を奏せざるを得ざる真理を宣傳すと信せりき。而して事實上彼等の眞理は天下を風靡せりき。是れ彼等の偉大なる世界的なる不可抗的なる功業なり。彼等が存在の意義を道破せるものは何等の讓歩をも敢てせざる批評家キユーノン教授の言に徴するを以て最とすべし。曰く。

「イスラエルの預言者は何事をか完成せる？ 彼等の事業の成果は何なりしか？ 如何なる價値を吾人は是れに歸すべき？

曰く倫理的・一神教は彼等の獨創なりしなり。彼等の信仰は高踏して唯一至聖至義なる——神其意志即ち道德的の善を世界に實現し給ふ神に到著したるなり。彼等は説教と著述とによりて是信仰を人類不離の至寶となしぬと。

然らば彼等が提供する心理現象に就きて吾人は如何に考ふべき？ 他の諸方面の論證を見るも猶人格神を否認する反對論者は是點に於ても亦預言者を以て自ら欺かれたるのひと一氣彈呵するに何等の困難を感ぜざるべし。但し彈呵し去ると同時に論者は極めて不利益なる窮地に立たざるを得ず。既に曰へる如く論者は人類進化の主要要素を隨て人類の進化そのものをも自慙自欺の結果と斷せざるを得ず。然るに之に反し論者と正反對の預想を抱きて預言者に接するに及んでは彼等は吾人の信仰を堅實ならしむるものと感ぜざる能はず。彼等はインスピレーションを受けたりと主張す。是主張は人類の未だ曾て不自然なりと思惟せざりし主張なり。彼等の主張する實驗にして果して眞實なるものなりとせ

ばそは他人の能力を以て解剖し得ざる底の實驗なりしなり。彼等は此主張を以て自ら使命を受けたりと告白せる事業を事實上客觀世界に完成し得たりき。彼等を解する上に何等かの假説が必要なりとせばそは彼等が眞理を語りしとの一事なり。神が人格的に人類と交通し給ふ證據の絶頂はやがて彼等その人なりしなり。

されど預言者の人類史上に於ける意義は之に止らず。預言者の著たる舊約聖書は今日猶儼乎存す。而して吾人が舊約聖書のインスピレーションを云ふ所なき吾人は只既往に於て一度そがインスピレーションによりて録されたるものなりとの意のみに非ず。その中には現在並に將來永遠に通ずるのインスピレーションあり今日是れが實驗的檢證を容れ得べしとの意をも含むと知るべし。多數の人々には聖書の傳説的見界を疑へる近代批判學により聖書のインスピレーションは全然撤去せられりたるに非ずやとの懸念の朦朧として心眼を掩へるが如し。されば批判學と靈的解釋との間に明劃なる區別の存するを指摘するは必要なることなり。文學上の批判は最廣義に於て一個の科學なり。其目的とする

所は事實の發見にあり、例せば何時如何なる場所にて何人の録せる書なるかを攻取し著者の使用せる文字は精密に如何なる用語如何なる意義なりしかを研究するが如し。其問題は複雑其方法は精巧にして多少主觀的なり。而も甚深重大なる目的を遙望する正當の科學なるを失はず。其攻取者が一樣に賢明ならずとて又常に必ずしも相互に一致すればとて他の科學の如き科學たり得ざるの理由とはならず。而して是科學は波斯經典若くは吠陀經典を研鑽すると同様聖書をも攻取り聖書を以て其領土中無上有力なる主材と觀す。然りと雖もインスピレーションに至りては全然是科學の領土以外に絶す。靈の聲は只靈の耳を以て初めて領するを得べし。聖書の言辭も事變も凡べて是れ靈の物質的發表手段のみ靈の人的發聲機關のみ。何人も是れに傾聴せずんばそは不鳴の樂器の如く是を手に取りて精査し批判し分類し説明するも靈性を振撼する潜伏力の存在に想著するを得ざらむ。是くの如く批判學とインスピレーションとは全然異別の平面上に行動するを以て何れの點に於ても相切摩するとあらず。其之れ有るが如く思惟する者は思想の混亂に基く。而して評論上批判又は靈感の何れかを偏

重なるものは屢是混亂に陥り易し。只だ是混亂にして吾人の同情を禁じ得ざる一個の場合あり、されど吾人は元より是を嘆美するものに非ず。そは純正の宗教家にして靈的眞理を思想若くは言語の特定形式と聯結し二者を分離するを厭ふこと靈性そのもの、分裂を恐るゝが如く只管二者を相結托せしめて初めて心の平靜を保ち得るもの、場合是なり。是種の態度は如何に自然的なりとするもそが弱點なるや疑を容れず。是弱點を析伏するはやがて靈的進歩の心髓をなす者少からず。是型の人士存在するが故に吾人は實質を捉へずして只管言語文字に固執するを以て眞の宗教と心得る多少眞摯なる宗教家を保庇することあり。かゝる宗教家は如何なる時代にも多少は存在せざることなし。彼等は靈の内的生命の何物たるかを知らず外形を握りて一切を握り得たりとなし隨て自高矜持の本能に従ひ彼等が所謂信仰の唯一根據と頼むもの、批判せらるるを見て周章恐懼措く能はざるものあり。其結果往々にして靈感否定論者の利器となり論者を以て文字と靈とを同一視せしめ文字上の批難に成功すれば直ちに靈性の否定に成功し得たりと思はしむ。尚に批判學者に取りては是態度は間然すべき所なし。

只論者は正當なる方法を不正なる目的に適用したるものなるの譏を遁るゝ能はず。一方に於ては批判學を斯の如く誤用するものあり、一方に於ては批判學を恐るゝの餘り自ら求めて敵者の擲擄を購ふ神經過敏なる杞憂あり。インスピレーションの辯護として第一諦の價値ある不拔の證明法を藐視し閑却せむとする傾向を助成したり。それ蓋し最高の證明法は自明證にあり、外部よりの辯論舉證に須つある者に非ず。是が最も明白なるは數學の公理の如き抽象的真理にして吾人はそが定言せらるゝを見るや直下に直觀的に其眞實性を認む。而して直接經驗に基く經驗具體的真理若くは事實に於ても同様に然り。眼前に目撃する事物の實在に對する信仰に至りては理論は之を加ふる能はず之を減する能はず。又美の知覺は分析によりて高まる者に非ず説明によりて變質せらるゝものに非ず。又親友の美點に對する吾人の確信は他人の彼れに關する毀譽褒貶によりて動かさるゝものに非ず。而して吾人がインスピレーションに對する信仰の證明は結局是種の根柢に立つものなり。是を救ゆるものは傳説也、是を推獎するものは批判學なり、是を命令するものは教權なり、されど是れが眞理を確立せしむる

唯一の根柢は實驗なり靈的の實驗なり。而して是種の實驗は諸多の形式を攝り諸多の程度に動搖するものなり。最初に吾人は舊約聖書を他の世界文學に對照せしめて其靈力の卓越せるに撲たれ。次に不規律なる編纂法に據れるにも拘らず其根柢に統一あり怪しくも地方的の一次的要素を超越せるに感じ、更らに其が人生の一切移像一切情態に遍通する普遍性包含性に驚倒せずんば非ず。次に自家生涯の細目行爲に對して聖書を適用するに當りそが如何なる内密的の必需にも剴切に該當するを發見し是種の思想は倍々堅實牢固とならざるを得ず。次に又時々突如として電光の閃火の如く吾人の心胸を照破する金言名句ありて恰も人格的の警誠と慰藉に接するが如く有聲の言語を通じて神の啓示を受くるが如き感なき能はず。

吾人が前掲一般經驗に就きて推論せる概言は特定經驗たる此場合に適用するを得べし。インスピレーションはインスピレーションを経験せざるものに取りては無意義なり。吾人は聾者に音楽を説き盲人に色彩を論ずるの愚を知るが如く靈覺なきものに向ひて靈感論を上下するの徒勞なるを認む。されど吾人は是に

吾人の意義を鮮明にし誤解曲解によりて議論の眞價を奪はるゝことなきを期せざるべからず。聖書のインスピレーションを信ずるは典據有る傳説を採用するの意にして各自が親證するを得ざる科學的定言を信ずると異なる所なし。されど聖書のインスピレーションを以て人格神を信ずるの理由となすときは其以上の意義を有す。少くも吾人が上述絮説せるが如き意義を有せざるべからず。而して是意義は必ずしも純主觀的の意義にはあらず。他人も亦是意義に於ける體現親證を閱過したるものなり。否な幾世紀幾時代を閱過したる後は種の實驗は消滅することなく聖書に附隨する典據的傳説に生命の脈絡を嘘入して以て今日に至らしめたるものなり。

是は吾人が靜平の態度を以て閑却し得ざる人類史上の一大事實なり。其自身單獨に見るも確實不拔なる事實なるに哲學上歴史上道徳上の論證と共に同一の原理に局中する點より見れば漸層的證明法の一要素として倍々其堅實性を加へ來らざるを得ざる大事實なり。

舊約書中に現れたる比較的人的なる要素、日常に於ける人類の精神活動に一段

酷似する要素を批判する者も猶インスピレーションの實在と價值とを疑ふ能はず。されど假りに一步を譲りて是種の批判は寧ろ靈感を否認するが如き結論を生ずとせむもそは只だ一段靈的なる要素をして對照の効果上愈鮮明較著ならしむるものに外ならず。

靈的の眞理は常に是れが傳達の利器となりしものに勝ること數等なり。此人にして此眞理を道破し得むとはその驚異大なれば大なる程其眞理の靈的起源を證するの力も亦隨て大なり。而して是際用ゐらるゝ言語の効果の過半は是種聯想に基く。言語の表面には顯はれずして而も斷えず喚發せらるゝ暗示と輪光とに基く。言語そのものは眞理傳達の利器として却つて吐息破顔滯泣睥睨素振聖莫象徴休微等の如き無聲の事物に劣るものなり。

「最も嚴密なる術語にて道破し得ざる眞理も

物語の中に具象化せられなば

賤夫の心の扉をも押し開けて

そこに容易く入り得なむ。」

而して吾人は聖書に於て之が最も著しき事例を發見す。聖書が僉夫を執ふるの能力は僉夫の無學なるが故に毫も減せず、又學究を執ふるの能力は彼の該博なる知識によりて毫も加はらず。蓋し聖書の力は無知と知識との乖違する畛域を超越すればなり。そは明裁なる觀念をも又畸形なる思想をも一様に透過して端的に靈性の上に電光を迸射するものなり。疑もなくジエローム、オーガスタンの眼に映じたる時の聖書は今日の如き文法と歴史とに照破せられたる聖書にては非りき。而もそが靈界の眞理を教ふる點に至りては當時と現代と何の逕庭あるなし。是くの如き權能はインスピレーションに據らずして如何にして有り得べきか。インスピレーションを否定する者は如何にして是現象を説明せむとするか。次に以上の思想は世界の他の聖典に大なる反射光を投ずるものなり。他の聖典は聖書に比して明かに劣等なるもの不完全なるものなりと雖も其中には個々の民族に對する神の教訓の傳達器と觀るべきもの多し。故にそも亦インスピレーションによりて録されたるものならざるべからず。舊約聖書と雖も基督教徒の手に傳はらざりし以前に於ては一國民の民族的典經なりき。舊約聖書を信ずれ

ばとて他の民族的典經が相對的にインスピレーションを受けたりや否やに就きては積極的にも消極的にも何等の學說を設くるの必要を認めず。元より他の典經の微光は舊約書の炬火に照破せられて太陽の前の星影の如く消えゆかむ。されど他の劣等なる典經が靈感を受けたりとの主張を許せばとて舊約聖書が靈感を受けたるの反證とはならず。却りて結果は反對にして他の典經の靈感は舊約聖書の靈感によりて確立せられ儼乎不可拔なる批准を得たるものと曰ふべし。而して是くの如き見界は決して崭新なるものに非ず、吾人が既に論及せしアレキサンドリヤ派の原則を特種場合に適用したるものに外ならざるなり。アレキサンドリヤの聖クレメント曰く「主が希臘人を召喚し給ふ迄に哲學は恐らく希臘人に直接に且つ第一義に於て與へられたるものなるべし」と。又曰く。「異教徒と希臘人との哲學はデオニッスの神話より破片を振ち取りしものにはあらで「不板なる道の神學書より其細片を竊み得たるものなり」と。

以上の所論を再言すれば次の如し。現代の研究と想像によりて描出せられたる活畫幀を凝視するに有史以前に於ける人生の活舞臺の背面には如何に制限あり

しとするも神が人類の心情及び良心に自啓し給へりとの痕跡疑ふに由なし。進んで基督前の歴史を攻駁するに及んでは是信仰の蓋然性は愈堅實となる。蓋し是時期に於ては全人類を通じて神を求めむとする傾向ありしのみならず神若くは諸神の自啓は過去現在未來に亘りて有り得との確信ありき。一方に於ては文學及び歴史上に是種の自啓の證左然り内實的靈的證左の確實なる鴻卷あり。勿論是くの如き小論文に於て是課程の梗要を跡溯せむと企つれば勢抽象的に流れざるを得ずと雖も而も今日に於ては宗教發達史の研究頗る細目に亘れるを以て富瞻なる材料を提出せば公平なる讀者は吾人の抽象的議論が無根の空論に非ざるを知るべし。而して宗教の人的方面は神的方面に比すれば觀察の便多きが故神的方面の歴史は誤讀誤解せられ純人的の自然發達史に外ならずと觀せられ易し。されど有神論者にして真摯に自家の信條を究盡せむと試みるものはそれが神の自啓の第二次的副次的發達に外ならぬを認むべきなり。且つ其課程の遲滯勝ちなりしは蓋もそが神的起源に基くを否定するの證據とはならず。人類の社交關係に於ても幾多の條件と障礙と制限とありて自他相領會するを妨ぐる場合多

し。「如何なる人も僕婢に對して英勇たる能はずとの俚諺を解釋したるヘーゲルの語に曰く、「そは英勇が英勇ならざるが故に非ず僕婢が僕婢たるが故なり」と。是解釋を擴大して吾人と神との交通問題に移し是交通に於て人類は如何なる資格を要求せらるゝかを考へなば歴史上の事實は吾人の意想外に出でざるのみならず却て吾人の期待に合調するを發見すべし。道德の一般標準が低級にして靈覺の眼光朦朧たる人種に於てはインスピレーションを受け得たるもの甚だ稀なりき。よし少數者にしてインスピレーションを受くる場合ありとするも爾餘の群衆を自家の高潮に軒擧せしむるには多大の時間を要せりき。されど一般の風潮にして一度高級の平面に高揚せられたる以上は宗教的色彩を帯ぶる人々の數不知不識の間に増加し先覺者の呼聲は比較的に大なる反響を呼び起したり。民族の種類を異にするに隨ひ宗教心の發達を異にし、靈感に接する機會と之を活用する能量とを異にし、先覺者に對する忠信の程度を異にし、其方面と特質とを異にする間に道德的靈的に於て最も修養深かりし民族は他の點に於て特色ありし民族の群を抜きて神を解する點に嶄然頭角を露はせり。そは恰も品性高き個人

が腕力知能藝術に秀でたる他の個人に勝れて高級の啓示を享け得る資格あるに似たり。以上は人類史上に於て神の自啓の發展し來れる徑路なりき。而して吾人の判断を以てすれば人類の想念し得る唯一の徑路なりしなり。何となれば人格の自啓は個人と個人とが性格を開展すると同様の徑路を攝ると外考へ難きに其徑路は當の關係者の品性及び特質に制限せられて漸次的に遲滯勝ちに開展せらるゝものなればなり。是課程は或は人類の動功によると曰はむも或は神の選擇によると曰はむも何れより曰ふも根本的の差別あるにあらず。蓋し動功と選擇とは同一事實の二面なり、表裏なり、相互密著なる關係ありて相分離すべからざればなり。

以上の論述に於て吾人は助めて本問題に關係ある材料を掲げ來り讀者の注意をして中心點を離れ岐路に彷徨せしむるの危険を避けたり。されど吾人は上述の解釋が無神論者をして變節せしめ得とは期待せず。只だ人類の歴史上に重大なる影響を與へたる最確實なる事實が靈的解釋法を容れ得るを道破し論者をして是主張の眞摯に研究商量すべきものなるを反省せしめ得ば足れり。加ふるに吾

人が人格神の信仰を論證するに當りて屢遭逢せざるを得ざる駁論は歴史は是信仰に反證を與ふとの淺見なり。されど吾人の見界は然らず。吾人を以てすれば歴史は疑もなく人格の信仰を裁可するものなり。よし歴史上の論證にして最後の斷案を下さしめ得るが如きものに非ずとするも他の論證と同様少くも漸層論法の一要素一連環を構成する程の効力はあるなり。

第八章 神と人の人格を具へたる耶穌基督

以上吾人が究明しつゝありし思想の方向は遂に吾人を導きて神子受肉の教義に邂逅せしめぬ。抑神子受肉は神の人格を啓示する終極完全の手段なれどその神の人格を豫定して初めて可能なる事項なれば其れ自ら身神の人格を論證する理由とはなり難し。而も人格神を信する者に至當なる期待心を満足せしめ吾人の教義をして調和透徹具足せしむるや明かなり。

是教義を破せんがために提發せられたる反論中最も由々敷ものは實は先天的の性質を帯ぶるものなり。曰く。神子受肉は餘りに怪異なり、餘りに錯倒の見なり餘りに吾人の思想に遠かるが故に眞理たる價值なし。人類の思想は是を領會せんとして先づ蹉跎し躊躇し、是を信すと告白する人々すら其過半数は一度も其信仰を透徹的に究盡せるには非ざるべしと思はる。而して既に是くの如き否定的偏見を擁して新約聖書中掲げらるゝ證明に接する者は勢否定的の結論を演繹せざる能はず。洵に多少無意識的に是種の私見に據りて當の事實を曲解せざる

者は尠し矣。

試みに問はむ。神子受肉の内在的非蓋然性は何處にありや。世人は陽に若くは陰に自然界に於ける人類の位地は空間上の身體の大きさ並びに情態によりて決定せらるゝと假定するに似たり。彼等は曰く吾人が地球を以て宇宙の中心と觀じたるは既に過去のことと屬す。宇宙に於ける人類の地位の此くの如く無價值なるはやがて其人格の無價值なるを證するに足る。されば渺茫無際なる空間と永遠無窮なる時間とに超越する大能の神が叢爾たる地球を舞臺とし蛆蟲の如き人類を看客として無比傑の事變を演ずべしとは考へられず。神子受肉説は要するに吾人の詮議に絶するものなりと。

是くの如きは畢竟想像なり、理論には非ず。而も人心を動かすこと甚大にして神子受肉説を全然排擠せしめざる迄も猶是れが信仰の熱度を冷却せしむるに足るものなきに非ず。されど再び言はむ難者の根拠は想像にあり何等の合理性に立たず。加ふるに難者は苟かに唯物説に立つものなり。價値の唯一標準を廣袤然り物質的廣袤に歸するものなり。されど請ふバスキアの言に聽け。曰く。

「物質的宇宙の全部が協力して人類を塵滅せむと謀ることあるも猶人類は自己が物質的宇宙全部よりも價值多しと感せむ。何となれば人類は自己の塵滅せらるゝを知るべければなり」と。然り人は自ら靈物なるを知る。彼の思想は高踏して空間に超越し彼の愛情は恒久不滅にして時間の魔力を折伏し彼の自由は純物質的存在界を蟬脱して視覚聴覺以上の世界に游泳す。而も如是新天地に於て彼は眞に嬰兒の如きものに外ならずと観す。生々潑潑たる彼の諸官能諸能力及び向上心はそれが圓現完成のために無限無極の存在を必要となす。げに現在の世界は遂に自己の所屬となるべき無数の存在界の一に過ぎずと信す。

若し人類が自己に對して下す本能の判定にして果して眞を博ふる者とせば物質的度量衡を以て彼れの價值を測定し物質上の計算を以て彼れの歴史を評價するは明かに背理なり。唯物説にして人格の起源を説明し得ざると前掲の如しとせばそは又人格の運命を預見測定し得ざるべき筈なり。又人格の運命の軌道中如何なる事變の起り得べきかに就きて何等容喙するの權利なき筈なり。加之人格が機械的評價に満足せずてふ事實そのもの、中にそは一層高級なる評價法の存

在を暗示するものに非ずや。神と交通し得べしとの内在感と人生の目的は遂に該交通に存すとの確信は人格を物的存在界以上に游飛せしむるものなり。而して神と接近すとの觀念は基督教の獨創にあらず。人類發達の如何なる階段にも人類宗教の如何なる形式中にも必然的に發見せらるゝ觀念なり。野蠻人には素朴的に聖徒には醇化的に或時代には悲壯的に或時代には誘導的に想念せられたるの別はあれど人類に恒常不變なりし點より見れば人性の一大特質を標榜するものならざるべからず。誠に神酒の傍に横臥するエビキユラス派の神々は抽象的の神々にして純本能の要求する神にはあらず。かくの如き少数者の神觀を除外しては人類一般に神と接近の状態にありと觀じたるは歴史に徴して證明し得べきことなり。犠牲、同族の會食、肉跡の制度、訖誼。畏るべき儀式を象徴とする聖なる神話、希臘に於けるオシリスと靈魂との冥合、印度の化身佛、希臘の自現神、羅馬に於ける皇帝即神の祭典是は潰神の嫌なきにあらず等はそれが確實なる證明なり。是等を一々單獨に觀察すれば批難すべき點なきにあらずるも全體として集的に商量すれば極めて重大なる思想を藏す。吾人は是によりて

神子受肉説の決して不自然にあらざるを知るべし。若し天文學が想像より出發して受肉説を排拒せむと試みるならば心理學は是れが擁護に有力なる根據を提供するものなり。何となれば心理に於ける吾人の人格そのもの、解剖は人格の價値の如何に大なるかを教ゆればなり。元より神子受肉説は不可思議なるべし。吾人はそれを否定せむとするものに非ず。されど天下の事少しく熟慮せば何事か不可思議ならざる。小は一文字の綴り方より大は世界の存在に至る迄悉く不可思議ならざるはなし。而して神子受肉説の不可思議なるは思想の根本的必然性と背馳するが故に不可思議なるに非ず。他の一切事が不可思議なる意識に於て不可思議なるのみ。而して自然の齊一律に反するが故に吾人は今日之を信する能はずと曰ふ者あらば吾人は却つてそれは神自ら自己の受造物の法則に絶對的服従をなせる行爲なりと答へむのみ。要は神子受肉説を破せんとする先天的假定の成立せざることなり。否な人類は先天的に受肉説を受け易き性質を有することなり。人類の本性其もの、中には神と合一せむとの欲望あり。されば神子受肉の教義が一度傳へらるゝや罪の世に住める人々の最高志望を満足せしめ得

たるに非ずや。而してそれは人類の缺點を最もよく補ふ所以なるが故に眞理ならざるを得ずと認められしに非ずや。

吾人は今は先天的立論を廢して證據問題に論入すべき順序に在り。但し吾人は是點に關する基督證據論の細目に亘りて逐次精細なる批判を下す能はず。只だ人格論に關係ある點を概論せむと欲するのみ。最初に高唱すべきは基督教が一統體一全體一現象にして新約聖書は其一部に外ならぬことなり。吾人は今日と雖も偶然と變化とに富める進化課程を通過し十九世紀間儼然として其尊威を損はざりし活潑々地の基督教に接觸しつゝあり。顧みればそれは分裂謗詐嫉視阿諛侮蔑等の幾多の難關に遭逢したれども遂に是等の危害を切り抜けて昔ながらの雄姿今猶凛乎たり。今猶基督教會には奇蹟的の悔悛奇蹟的の純潔奇蹟的の靈力在り。弱き者強くせられ悪辣なる者懲戒せられ肉情は折伏せられ傲岸は懺服せられ匹夫も哲人も賤夫も閭臣もイエスキリストは神なりとの信仰を抱きて新生命を拓き來る。誠に基督教徒の純潔は異教徒の腐敗と對照すれば嶄然たる境界を劃し、基督教徒は地の鹽なりとの揚言の虛ならざるを見るべし。基督教は

人類の理想と本能とに新光明を投じたるものなり。現代の世界と古代の世界との間に嶄然一境界線を劃したるものなり。抽象論者は如何に論ずるも人生の實際を研究せるもの誰れか基督教が人文史の最大要素たりしを否む者あらむや。果して然らば新約聖書と其感化力然り基督教徒の生と死と行爲とに及ぼせる感化力とを分離するは不可能なり。新約聖書は新生命の降臨を宣傳し現下生存せる基督教徒の多數は其生命を體現せりと告白す。基督教の開祖は「見よわれ爾曹と共に世の終末まで在るべし」と宣言せりと傳へらる。而して全世界を通じて幾萬の基督教徒は眞摯に熱誠に開祖の現前を感得すと信ず。而して使徒時代以來彼等は是信仰によりて偉大なる事業を全うし忍び難き苦難を忍べり。是くの如き大なる運動は福音書と使徒書と分離して考へ難きことなり。二書は是くの如き新生命の基點を録するものなり。されば二書の價值を無視する極端なる批評家は歴史上に顯れたる最大事實を原因なくして突然生起せる結果なりと主張するものなり。又福音書中より奇蹟力もなく神にもあらざりし人物を想像的に描寫せむとするものは嚴正の意義に於て福音書を寸裂するものなり。キリストを

超人となす思想は福音書全部に溢瀝し之を織物に比すれば何れの經にも緯にも之を有機物に比すれば何れの織にも維にも浸滲し潤染するを以て是思想を抽離せんと欲すれば全部を粉碎塵滅せざるべからず。加之新約聖書の背景に不可知なるキリストありとせむも、また福音記者等は是不可知なるキリストを曲解し誤傳せりとせむも、而も猶基督教を建設せる者は是不可知の基督にはあらで曲解誤傳せられたる基督なりしなり。基督教運動の中心點となり人類の心情と良心とを根底より搖撼したるものは單に神は愛の父なりとの思想に止らで愛の父たるを證するに獨り子を世に遣せりととの觀念なりき。歴史的基督教を胚胎せる純一無二の源泉は神子受肉説と其含蓄の全部とを信するの信仰にありき。之に反し若し基督にして單に人なりしとせば福音記者等は實に太甚しき曲解をなせるものなりしなり。故に吾人の問題は極めて簡單なる一境に局中し來りぬ。基督教の傳道基督教の殉教者心情の聖く謙れる基督教徒靈性の完成したる最勝事業人目を聳動せしめたる至聖者等の事業凡べて人類の歴史上進化と善事を齎らせる偉業は何れも詐譎者若くは愚人よりインスピレーションを受けたる結果な

りや。人類の功業は果して無意義なりしや。歴史は遂に偶然に支配せられ宇宙は最後に渾沌に歸すべきものなりや。是れ問題の焦點なり。されど科學者が大膽に宣言するが如く是宇宙に合理的秩序ありとせば而して又哲學者歴史家の立證するが如く正義を目的として進行する合理的秩序ありとせば吾人は宇宙の組織が渾沌に歸するを以て其終極と観する能はず。猶又道德進化の主要要素が偶然より派生せるものと考ふる能はず。夫れ基督の傳記には權威あり驚異すべき文字多し。否な福音書そのものは文學上の怪異現象也。實に猶太民族の期待心を其絶望に終らむとする時に圓現し、不用意の中に異教徒の志望を満足せしめ、俗間の經營をして其功果を奏せしめ、不成功なるが如くして成功し、諸多の有神論證に事實上の批准を裁可じたる者は耶穌基督の生と死と復活とにありき。而して基督の生命は今日猶世界に躍動しつつあり。無比の事實として萬人の實驗する所となりつつあり。是無比の事實より過去を推定して福音書の記事を真理なりと断定するは決して錯倒の見に非ず、嚴正に科學的態度を遵奉しつつあるもの也。事物の眞性を知らむと欲せば

發達課程の完了せる成果を見ざるべからずとはアリストートルの至言なり。宗教を研究するに當りても現在と過去との活關係を閉却し今日の成果を無視して既往の原因を單獨に研究するものは街學者流の考古學徒となり了らむ。現在の人類が如何なるものなるかは以て其祖先の如何なるものなりしかを證するに足る。今日の人類を見るものは吾人の父祖が如何なる容貌を著け居たりとするも畢竟猿猴以上の精神を具せしを断定するに足らむ。今日良心の如何なる性質如何なる特徴を有するかを知る者は其起源が如何に不明瞭なるも快樂若くは功利以上に基因するものなりしを知らむ。斯くの如くして今日基督教徒の間に行はるゝ靈的實驗に參じ得るものは基督教の始祖が人間以上の存在なりしを確信して可なり。

次に新約聖書の紙面に描寫せられたるイエスキリストは吾人の人格に全然新たな光明を投ずるものなり。彼は愛を以て人類本性中の一切官能一切作用を統合する中心原理なり一切屬性を派出する分出點なりと説けり。彼は之が人類の絶對根本的普遍的特質なるを道破せり。彼は人類の道德と人情美とは只だ只社

愛より溢流して初めて完璧すべきものなるを教へたり。更らに一歩を進むれば彼は實踐と苦闘、行爲と迫害、努力と苦痛の如き人生の矛盾が只だ愛によりて調停せらるゝを陳べたり。何となれば愛の必須要件は犠牲にして完全なる犠牲は完全なる愛なればなりと論せり。元より吾人は基督以前の教師にして是と對峙たる教訓を與へたる者ありしを認めざるには非ず。されどイエスキリストは是教訓の根柢を掘みたるのみならず前人の敢て爲し得ざりし實踐行爲に出でたりき。彼れの生涯は眞に愛の生涯なりき。彼の死は眞に愛の死なりき。彼は洵に前人の讀破し得ざりし人性の深旨を照破し得たりき。彼の照破せし處そこに人性最眞實の理想あり。而してそこに理想の圓現あり。それ自家人格の内容は人類と神とに關係する一切事件を判定する所以の標準なり。人類の批判作用の最高控訴院なり。而して基督の啓示せる人格は神を批判する新標準を與へたるものなり。基督の生涯に縁て人類は人類に必要な唯一物の愛なるを學び、未だ會て知らざりし愛の深さを窺ふを得、かくて愛は人類が満足を以て神を想念し得る唯一の範疇となりぬ。

有ゆる宗教的人種を遍通して神は人類中最も尊重せらるゝ諸多の美點を最高度に於て具足すと思惟する習慣なきはなかりき。かくて神は人類より一層賢明に一層偉大に一層神聖なるものと思惟せられぬ。而して是等諸屬性の源泉が愛に存するを認むるや神は超人的の愛を有せざるべからずとの思想に達しぬ。されど超人的の愛は犠牲によらずして如何にして是を證明するを得べき。而して是思想の初めて人心に觸發せられたるは抽象や反省の課程に縁る者にて非ざりき。そは人々イエスキリストを仰望しイエスに追隨しつゝありし間に無意識的に彼等の心囊に感染潤浸したる思想なりき。同時にイエスキリストは超人なり神の子なり人類のため自己を犠牲とする神なりとの確信は徐々に階次的に進捗的に發展し來りぬ。蓋し天啓と天啓を領會する人心の開發とは同一事實に於ける兩面の要素なればなり。

當初人類をして如是尨大なる信念を握らしめたる證明は如何なるものなりしか。遠隔せる現代の人が是種證明の批判と評價とを試むるは蓋し不可能に屬す。休微と奇蹟とは明らかにそが一部をなせしならむ。されど是種の證明は只だ能く

當代の人心に對して初めて確信を與ふべきのみ。其時間其場所其環境其傍觀者の精神狀態等を抜き去らば恐らくは是確信を與へ得ざるべし。然るに今日如上の諸關係を吾人の眼前に再現せしむるは立證のためにも反證のためにも俾しく不可能なり。然るに奇蹟を否定せむとする論者は大前提として先づ是不可能事を假定せざるべからず。而して奇蹟を信する基督教徒は聖書を信じ信經を信する態度と一貫せる態度を取るものながら彼の信仰の根據とする所は神子受肉の教義にあり。神子受肉の教義は必ずしも奇蹟によりて支持せらるるものに非ず。是教義が一度吾人の心魂に徹して吾人の生命となるやそれ自ら自明證の眞理たるなり。其眞理たるを證するには奇蹟論を提出する必要なきなり。吾人は自家内部に於て之を検證し之を體得せるもの吾人の生命は是教義と離るべからざる關係を結ばれたり。されば神子受肉の教義を最初に宣傳せし人士の標語は權能なる文字にてありき。人類の心情並びに良心を握る權能なる文字にてありき。是神秘なる權能を解體し屢滅し破壊せんと企てたる十九世間の努力も遂に之を如何ともする能はざりき。之が攻撃者すら猶これを閉却しては枕を高うして晏

如たるを得ざりき。洵に是教義は怪しき魔力を以て敵と味方との別ちなく是に關係する者を封心縛體したりき。

吾人は今神子受肉説を中心として逐次的詳論を試みむとするものに非ず。吾人の論文は曰はゞ其の種の詳論を挿符すべき輪線を劃したる下繪の如きものなり之を要するに一方に於ては宗教本能に根したる歴史事實として又人格の解析を分明にしたる哲學の批准によりて人類は人格神の自啓を期待したりき。而して是期待心は漸次醇化せられ愛の神を要求するに至りて其高潮に達したり。又一方に於ては是期待心の高潮に達したる瞬間是醇化を完成したる同一手段を通じて神の自啓は遂に興へられぬと傳へらる。若し是傳説にして眞なりとせばそは怪しくも歴史上の諸事實に符合し爾來の人類史を塑像し來りたるものなり。若し又是傳説にして何れの程度何れの形式に於ても銖銜の誤謬ありしとせば全傳説は崩壊し填覆し支離滅裂に歸せむ。而も是くの如く書餅に歸すべき傳説は猶依然として人類史を塑像し人類の幸福と善事とを進捗せしめつゝあるなり。されば吾人は是傳説に關して二者何れかを選ばざるべからざるの地位にあり。

而して何れを選ぶべきかは吾人自己の實驗に徴せざるべからず。自己の宗教本能は信頼するの價值ありや。宗教本能より演繹したる合理的結論は果して事實に符合するか？宗教本能の結果たる道徳判斷は果して正當なりや？之を要するに人類は有史以前より自信し來れるが如く果して靈物なりや否や？吾人は是等の諸問題に對し然りと答へ得る諸理由を提出したり。而して其の理由が嶄新の獨創見に非るは以て其真理たる點に毫も妨ぐる所なし。又是等理由の根柢は内省的分解に存するを以て苟も哲學的頭腦ある人は直ちに其正否を辯じ得べし。元よりプラトーン時代に比すれば今日の方遙かに明裁なる形式の下に祖述せらるゝと雖もそれが確信を興ふる點に至りてはプラトーン時代と今日と瑣の等差あるなし。又其等の立論は根本的に形而上的なるを以て形而下の科學が如何なる發見をなすも毫も之に動搖せらるべきものに非ず。否な形而下の諸科學が思想の價值と其結論の正當とを信頼し計算によりて檢證し預見の實現を立證し得る以上は思想を不離の要素とする意識全野の諸現象を間接に辯護しつゝあるものなり。されど人類本然の自重心をかくの如く信頼する以上は吾人の論證をも同時に正

當なりと斷定せざるべからず。人類の宗教本能は物質界を指導支持する人格ありと信じ、人類の理性と良心とは第一原因と終極原因と道徳的支配者とを要求して是本能を辯護す。又人類の期待心は件の人格が彼を受容する能量の増加するに應じて自己に自啓し給ふならむと信ず。而して件の自啓が一度興へられたりと傳へらるゝや豫め抱懐し居たる豫想と全然異りしにも拘らず自己の希望を圓現せしを以て之を真理として受容し且つ既往の思索課程全部を究極的に批准せるものなりと認めたり。

されば神子受肉説は既往の思想の圓成なり絶頂なり。基督教徒は是説と人格神の諸論證とを分離する能はず。元より神子受肉説を信せざるも是論證は動搖するものに非ず。而も其が喚發する期待心は神子受肉説に據らすんば満足せられず。神子受肉説は是期待心を満足せしめ加ふるに既往の思想の虧けたる一點を補足するものなり。以上は吾人が人格神を信する論證の概論なり。而して是際吾人は二三の暗示を興へて讀者の反省を請はむと欲す。第一に上述の論證が抽象に非ずして具象的なることなり。是等論證の根據たるものは複雑無數なる事

實にあり。而して事實に就きて正當なる判斷を下さむと欲せば自家の實驗に訴へざるべからず。例せば道德的論證終局的論證乃至宇宙的論證の如きも是れが普遍性と一般性を掲げ來るのみにては未だし。最初に自家の心象上に自家血證底の實例を繪かすんば其正價を商量する能はじ。而して血證體現は多大なる忍耐と時間を要す。加之上げ個々の論證は漸層的論法に従ひ最後に絶頂の一點に到りて統率せらるゝに非んば完璧の域に達する能はず。夫れ個物に就きて眞理なることは勿論其合成果たる統體に就きても眞理ならざるを得ざるは論なし。されど漸層的論證の眞價を品隲せんと欲せば更らに一步を進めて合成果たる統體は個々物の總和以上に何物か特種の價値の添加し來るを忘るべからず。一個の新事實が添加し來る毎に舊事實を排拒するの困難も亦増し來り最後に龍點睛底の一個焦點に於て局中するに至れば全體は不洩不漏不離不拔の凝結體となるなり。次に當の論證は何れも往古より全人類に踏襲せられて今日に至るまで傳相せられ來りしものなればそが幾億萬人の心に満足を與へたるものなるを忘るべからず。そは満足を得たる人々の數の夥多なりしのみには留らで、柄堅

相容れざる諍論を閱過したる後大なる哲人高き聖者を首肯せしめ其言辭の上にこそ變更はありたれ其實質に至りては古來不變不動なりしなり。知るべし吾人の論じつゝありし理論は歴史上に顯れたる抽象的推理作用の連鎖にはあらで全人類の宇宙に對する態度なりしを。恰も無數の細流が流れ流れて小川を成し小川の水は集りて大河を作し大河は宗潮して巨海の中に没入するが如く無數の源頭より發生せる無數の思想は無限の歲月を閱過して遂に一原理に歸著したりしなり。

夫れ抽象的論理學の捏造せざりしものは又抽象的論理學によりて破せらるゝことなし。かの繪畫彫像又は建築を見て其闕陥を指摘するは容易なりと雖も是を獨創する天才ある者は稀れなり。こは抽象的思想と具象的思想との間に涉るべからざる一大溝渠の架せらるゝを示すものなり。吾人の眼前には宇宙に對する一大原理在りて祖先相傳の尊威堂々たる大議論の上に立てり。而してそは具象的積極的原理なるを以て徒らに抽象的批難を試むるものは是を如何ともする能はず。甲の點に疑惑あり乙の點に難關あり此に不確實あり彼に曖昧ありと難す

るのみにして論者の撤去せんと欲する箇處の代りに何等積極的假設をも立せずんば畢竟それは空論のみ、銖錙の益あるものに非ず。見よ宇宙は一個の事實に非ずや。宇宙に對する説明の何れかは眞理ならざるを得ざるなり。然らば人格神の原理を破らむと欲するものは如何なる積極的假設を提發するか？最初に掲ぐべきはヘーゲルの左黨によりて解釋せられたるヘーゲルの觀念說なり。而して或人の曰へる如く是はヘーゲルを曲解せるもの而して此曲解はヘーゲルをして知的若くは道德的何れかの過失に陥れるものとせざるべからず。次にはショーペンハウワールの意志を改善せむと勗めたるハートマンの意識的無意識者あり。更らに又フイヒテの道德的秩序ありマシユウアーノルドの正義を進捗せしむる無窮の非諸我あり。されど以上の思想は何れも人格を離れては不通不達思想なるを忘るべからず。何となればそれは人格の官能より抽象せるものなれば其源泉と切斷せば全然無假象たるのみならず絶對的に無意義となるべければなり。そは「虛名のみ空説のみ憤怒の聲は響き渡れど何等の意義なきものなり。かく曰へばとて吾人は以上諸家の學說に才氣洋溢する洞察力と富瞻なる暗示の伴ふを

否むものに非ず。そは疑もなく天才者流の思想なり。但し哲學者は狂亂せる詩人に外ならずその大儒學徒の冷語に該當する天才者流の思想なり。論理的に演釋せられ組織的に排列せられたる學理と號するを得べし。而も遂に全備せる學系には非ず。何となれば彼等が學理の樞機とも稱すべき原理は架空の浮泛說にして何等の支柱なく徒らに冲天に懸垂せる唇氣樓に外ならざればなり。彼等の思想を精察するに及んでは剞劂者も後繼者も何れも無意識裡に基本的抽象觀念を人格化しつゝあるを知るべし。而してかく彼等が竊かに人格觀を採用するは彼等の學說をして多少の興味を吾人に惹起せしむる所以に外ならず。

是に於てか彼等の學說よりも唯物論の方遙かに勝れるが如く思はる。されど唯物論も畢竟是らの如き見界の一種たるに過ぎざるは既に曰へる如し。物質も亦是を單獨に考ふるときは無意義なる抽象に外ならざるなり。吾人の物質を知るや最初に自家肉體中の物質に於て知るの外なし。吾人が物質を内部より觀察し得る場合は自家肉體中にあるのみにして肉體以外には在らず。吾人が物質の内部に入り得べき場合は自家肉體の中において肉體以外には在らず。然るに自家

肉體中の物質は人格と最も密著なる結合にあり。されば精神又は人格に支持せられざる物質が存在するか又存在し得るか又は是らの如き物質を假定し得るかは吾人の全然答へ難き問題なり。

觀じ來れば人格神の代用として提發し得る積極的假定は一もあるなし。而して曰ふまでもなく人格神は人格の抽象産物には非ざるなり。故に非有の空名には非ず。又人格神は半成の擬人觀に非るなり。故に論理的不透徹を犯すものに非ず。次に一端は假設的無神論に初まり他端は假設的有神論に終る無限の諸説を包含する不可知論なるものあり。そは信經に基く信仰ならざる限り如何なる傾向の主張とも相提携し得る立場なり。されば時々透徹を求むる思想家にして之れが定義を下さむと試みたるものなきに非りしも其消極性は遂に定義の下に網羅せらるるを許さざりき。只だ不可知論が最も同一視せらるるを厭ふものはビル氏の懷疑説なり。即ち徹底的の懷疑論にして懷疑其ものを懷疑する懷疑論なり。然るに一方に於て不可知論は既知と未知とを峻厳に區別し既知は檢證し得との理由を以て之を採用し未知は檢證し得ずとの理由を以て之を拒斥す。

されど思想課程に何等かの眞理あるを許す程のものは是區別の無意義なるを認め不可知論の歸結が遂にビル氏の懷疑論に陥るを許すならむ。何となれば不可知論の根柢は物理学にありといふに其根柢たる物理学は二個の想定を設けざるべからざればなり。二個の想定とは其第一に宇宙の可知的なることなり。元來物理学は宇宙を解釋せむとして發生せるものなれば其出發點に於て宇宙が解釋し得べきものなるを想定す。是想定は疑義を絶する迄に一般的の想定なれば人動もすれば不問に附することあれどそは重大なる含蓋を有す。宇宙にして解釋し得べきものといふは宇宙に可知性あるの意なり。然らば其可知性の所有者は何者なりや。そは少くも容知若くは精神以下なる能はず。故に是想定の基礎は宇宙が一個精神の作物なりといふにあり。かくの如くして物理学の出發點は形而上の想定に待たざるべからず。さらばそは既に不可知論者の所謂既知の畛域を超越せるものならざるべからず。想定第二は人類の推理作用が信頼に値することなり。然るに推理作用は孤立して存するものに非らず。そは情緒及び意志と共に自他相纏綿相錯又して一人格の不離要素を構成せり。されば人類の

推理作用を以て一度信頼に値するものと許す以上は勢是れと不離の関係ある情
意の作用をも信頼せざるべからず。而して一度情意の作用を信頼する以上は道
徳目的の宇宙に存在するを許さざるべからず。恰も推理作用を信頼するは宇宙
に合理的秩序あるを承認するものなるが如く情意の作用を信頼するは宇宙に道
徳秩序あるを許容するものなり。論じ来れば吾人は既に不可知論の既知以上に
還没せざるを得ざるなり。故に不可知論を抛擲せざるを得ざるなり。之に反し
是歸結を拒斥するは精神活動の全作用を疑ひ世に堅實性なるものなく一切は臆
断に外ならずとなすものなり。されば科學なるものも亦悉く臆断なりとなすも
のなり。而して不可知論者の態度は最後に是くの如き自家撞著の歸結に陥らざ
るべからず。神の人格を否定するは人類の人格を否定するもの人類の人格を否
定するは人格的諸要素を悉く否定するか曖昧の中にも非るか何れかにありされ
ば不可知論者は経験を信頼すと揚言しながら経験を拒斥しつゝあるものなり。
蓋し人格の第一義たる本能を否定するは経験となりて顯はるゝ精神作用を一切
否定することなればなり。

以上掲げ来れば無難なるものは只人格神の假定のみ。人格神は洵に如何なる存
在様相にありやは吾人の思慮に絶す。而も思惟欲念愛尙する吾人の人格と人格
的交通をなし得ざる者に非ず。何となれば吾人の人格は潜勢的に無限なり。そは
有限なるものに非ず、固定なるものに非ず、種子の如く萌芽の如く無限の未來
を有する潜勢的存在なり。一段高級の自我を豫告する前驅者たり。其内包より
曰ふも能量より曰ふも特性より曰ふも外延より曰ふも自我は無限無窮に擴大し
得べきものなり。吾人の最後に到達すべき目的地は遂に無限大のものならざる
べからず。吾人の周囲には嚴密に有限的の存在のみあれど内部の人格は獨り無
限の生命を有するものと考へざる能はず。されば人格神なる語は吾人の人格と
似て而も無限に超越する存在者を意味す。而して人格神は如何に吾人の制限を
超越すとも畢竟有意義の存在なり。吾人の思索と全然平面を異にするものには
あらず。吾人の思想を根底より撤去するが如きものにはあらず。約言すれば人
格神なる思想は積極的意義を有するものなり。加ふるに人格を分解すれば三重
の存在様相を有し三位一體の天啓と好く合調す。而して人格の三重性に就きて

は疑ふべき餘地なし。人格の根本性は主體と客體との間に行はるゝ關係にあり。但し是際吾人の人格は三重にあらずと強いて論じなば論じ得られざるにもあるまじ。されど三重に限るや否やとの問題は餘りに價値あるものに非らず。寧ろ三位一體論が天啓なりや否やを以て問題とすべし。吾人は人格の分解を最初に試みて然る後神性に其結果を適用せしものに非ず。神性の天啓を最初に得たる後吾人の人格を分解して初めて二者契合する節あるを發見せるなり。されば三位一體論は果して真に天啓なりしや否やは是れ價値ある問題なり。然るに吾人は今日三位一體論が如何にして神學上の形式を攝取するに至れるかの由來と徑路とを最も明白に跡溯するを得べし。是はイエスキリストの人格より流れ來れる具象的眞理にして最初教會の洗禮式語の中に現れ實踐上の必需に對して實踐上の糧食を供給したる思想なり。教會の信經を歴史的に研究する者は何人と雖も是を疑ふ能はず。三位一體論を知的に闡明せんと企てし學者も該教義の本質は常に天啓に基くものなるを忘れざりき。是教義と吾人の心理作用とが合調する節あるを發見せしは信經構成の課程に於ける偶然の結果のみ。否な心理學その

ものは是教義を知的に闡明せむがために努力せし結果發生し來れる副産物のみ。是方面に於て最大の貢獻をなせる者にオーガスタンの右に出づる者はあらず。彼れが三位一體論の結尾に於て掲げたる祈禱文は明らかに這般の消息を傳ふるものなり。曰く。

「オー主よ。われ等は父と子と聖靈なる主を信す。若し主にして三位一體の神に在さずば眞理は往きて萬國の民にバプテスマを施し之を父と子と聖靈の名に入れて弟子とせよ」とは宣はざりしならむ。オー、主なる神よ、主はわれ等に向ひて神ならぬものゝ名に入れてバプテスマを施せとば宣はざりしならむと。

之をオリヂン、アサナシウス、ヒラリ、パシル、二人のグレゴリーに徴するも毫も異なる所を見ず。彼等は哲學を基督教に利用したるものにして基督教を哲學に應化したるものにあらざりき。

之を要するに吾人は人類史上人格神の自啓なるものに接したり。而して其自啓の興へられしやアレキサンドリヤに非ず雅典に非ず哲學者に非ず文人に非ず洵にガリラヤの地敦厚朴訥なる漁夫の輩に興へられしなりき。而も其際用ひられ

たる言辭を分解するに及んでは前人未發の深奥なる哲理と真理とを窺し最高最奥の神觀を包攝するを見る。哲學の産物に非ずして而も哲學的分解と合關すること一に此くの如き所以はそが天啓に據るものなるを證せずして何ぞや。然らば是くの如き天啓の與へらるべき必要ありしか？曰く大にありき。そは神は愛なりとの思想に全然新意義を加へむがためなりき。凡そ愛には二種あり。一は長上若くは儕輩に對する同情の愛にして一は劣輩に對する自卑の愛なり。基督前に於て人は如何様に神の愛を考へしとするも自卑の愛以上には躋り得ざりき。無限に偉大なる者が無限劣等なるものに對するの愛以上には出でざりき。更らに嚴密なる言語を籍りて曰はゞ神の愛と曰ふもそは創造上の偶爾性副性以上には考へ得ざりき。愛を以て神の本性そのものとは彼等の到底想著し得ざりし所なりき。而して是思想を一變したるものは神に複重性あり神は三位一體なりとの觀念なりき。神に複重性あり故に神は絶對的に本性的に永遠無窮に愛なり。されば神の愛は自卑愛憐の愛に非ずして最高最大最強の熱情愛なりと考へざるべからず。神の本性を看取したる洞見力はやがて人類の運命に新光明を投じた

る燈火なりき。神子受肉説は神の自卑的愛憐に與るに過ぎざりし状態より軒擧して人類も亦神の不朽愛に連り不朽愛の目的たり得るに至らしめぬ。要するに神の現實的三位一體は人類の潜勢的三位一體を説明し神視觀の思想は人視觀の術語を派生する淵源なりしなり。

顧みれば吾人の論歩は轉輾して遂に出發點に回歸し來りぬ。さらば吾人は今何と言はむか。只だ前掲所論を拮据して筆を擱くべきのみ。吾人の人格には自己意識と自己決定力との二屬性あり。以て人格を純動物純物體と畛域を異にせしめ精神界の領域に入らしむ。而して精神界の物質界に卓越する所以は人格あるが故なり人格の人格以外のものに勝るは自明證の確信に據る。是思想を擁して周圍の宇宙を觀するに吾人は宇宙の内部に人格を認めざるを得ず。時劫も反論も到底移し得ざる底の本能の聲によりて人格を認めざるを得ず。而して如是人格は之を感得するを得れど之を目撃するを得ざるなり。又一方に於ては反省作用は上述の如き本能の聲を裁可して其堅實性を不拔の根底に置くものなり。蓋し宇宙は合理的にして調和あり美あり加ふるに道德的の目的を進捗せしめつゝ

あるに是等一切は何れも人格の色調を帯び人格の外に發見し得ざるが故に宇宙には人格的精神的原因なかるべからざればなり。是に起るべき問題は神は何故に一段明白なる手段を取りて自啓し給はざるの疑惑なり。されど亦人類の交際關係を比論とすれば強ち解し難きことにもあらず。人と人との交際に於て聖き友を解するには聖き心なかるべからず。罪は聖を知るの障礙なり。是れ事實なり。而して是點を明らかに認むる者にして初めて宗教の歴史を讀破するの資格あるものといふべし。歴史の提供する活畫幀は決して吾人の期待と背馳するものに非ず。朦昧時代の人類は周圍の神に對する觀念も又朦朧なりき。國民の進歩は國民の啓蒙を促し人格的洞見力の増進はインスピレーションの進程を齎らし、聖者を渴望するの念最も切なりし人種は選ばれて天啓を最高度に享有するの器となりぬ。而して最後に聖善なる人種より至聖なる者現れ人類を糾合して眞の愛の生活を送らしめぬ。是れ極めて至當なる順序にして又人性を完璧ならしむる好手段なり。彼は愛の源泉たる神の自啓として親ら受肉降誕し給へり。人類の有限不完全なる人格が遠き來世に於て其終極究窩に達し得るは

只だ只だ彼れと合一するに據るのみ。

神と人との人格論 終

明治四十三年六月廿七日印刷
明治四十三年六月三十日出版

(定價上製金八拾錢
並製金六拾五錢)



版權
所有

翻譯者 東京市麻布區芝森元町一ノ二七
矢倉保

發行者 東京市芝區高輪北町三十番地
イー、ライ、アソン

印刷者 東京市京橋區木挽町二丁目十三番地
佐藤保太郎

印刷所 東京市京橋區木挽町二丁目十三番地
中屋商店印刷部

東京市神田區小川町壹番地

發行所

普光社

神戸市中山手通三丁目五番地

販賣所

聖公會出版社

川崎市 蔵譯 ◎近刊二種

基督敎信仰論

四六版

上製金四十錢

並製金三十錢

GIRDLESTONE—Why Do I Believe in Jesus Christ? Translated by I. Kawasaki. Price Paper 30. Cloth 40 Postage .04

管 黃 吉 譯

教會の起原

四六版

上製金五十五錢

並製金四十五錢

RACKHAM—How the Church Began. Translated by Rev. T. Kwan. Price Paper .45 Cloth .55 Postage .04

長老小林神學士改譯

福音の道

總シローム

定價金七拾五錢

郵税金八錢

MASON—The Faith of the Gospel. Translated by Rev. J. H. Kobayashi. Price Cloth .75. Postage .08

細貝邦太郎譯

基督敎師父傳

四六版
百五拾頁
シローム

定價金四拾錢

郵税金四錢

PERRY—The Christian Fathers. Translated by K. Hosogal. Price Cloth .40. Postage .04

長老小林神學士譯

基督敎徒の品性

四六版
總シローム
定價金參拾錢

ILINGWORTH—Christian Character. Translated by Rev. J. H. Kobayashi. Price Cloth .30. Postage .04

稻垣陽一郎譯

新神學と舊宗教

菊版
總シローム
百五拾頁
定價金六十五錢

CORE—New Theology and Old Religion. Translated by Rev. Y. Inagaki. Price .65 Postage .08

宋倉文學士譯

神の内住

定價
上製金七拾五錢
並製金六拾錢
郵税金八錢

ILLINGWORTH—Divine Immanence. Translated by T. Shishikura, M. A. Price Paper .60. Cloth .75 Postage .08

ハチエラー、オン、アー、岩井順一譯

舊約聖書之眞價

定價金七拾錢
郵税金八錢

KIRKPATRICK—The Divine Library of the Old Testament. Translated by Rev. D. J. Iwai, B. A. L. F. H. Price .70 Postage .08

會公聖
叢神書學
卷四第

會公聖
叢神書學
卷壹第

會公聖
叢神書學
卷貳第

會公聖
叢神書學
卷參第



加奈太 監督デビッド、ウキリアムス著
ヒューロン 長老イー、ライアン編
執事 榊原彌 譯

聖公會之立脚點

WILLIAMS—What the Church Stands for. Price .03

(再版) 定價金 三錢

再版 通俗創世紀

Selected Portions of the Old Testament in the Colloquial. By Miss Ballard Price 10. Postage .02

定價金 拾錢
郵税金 貳錢

共會文學士譯

復活の證

BULL—Evidences of the Resurrection. Translated by T. Shishikura, M. A. Price 10. Postage .02

定價金 拾錢
郵税金 貳錢

リドン博士著、執事島田弟丸譯

死後最初の五分間

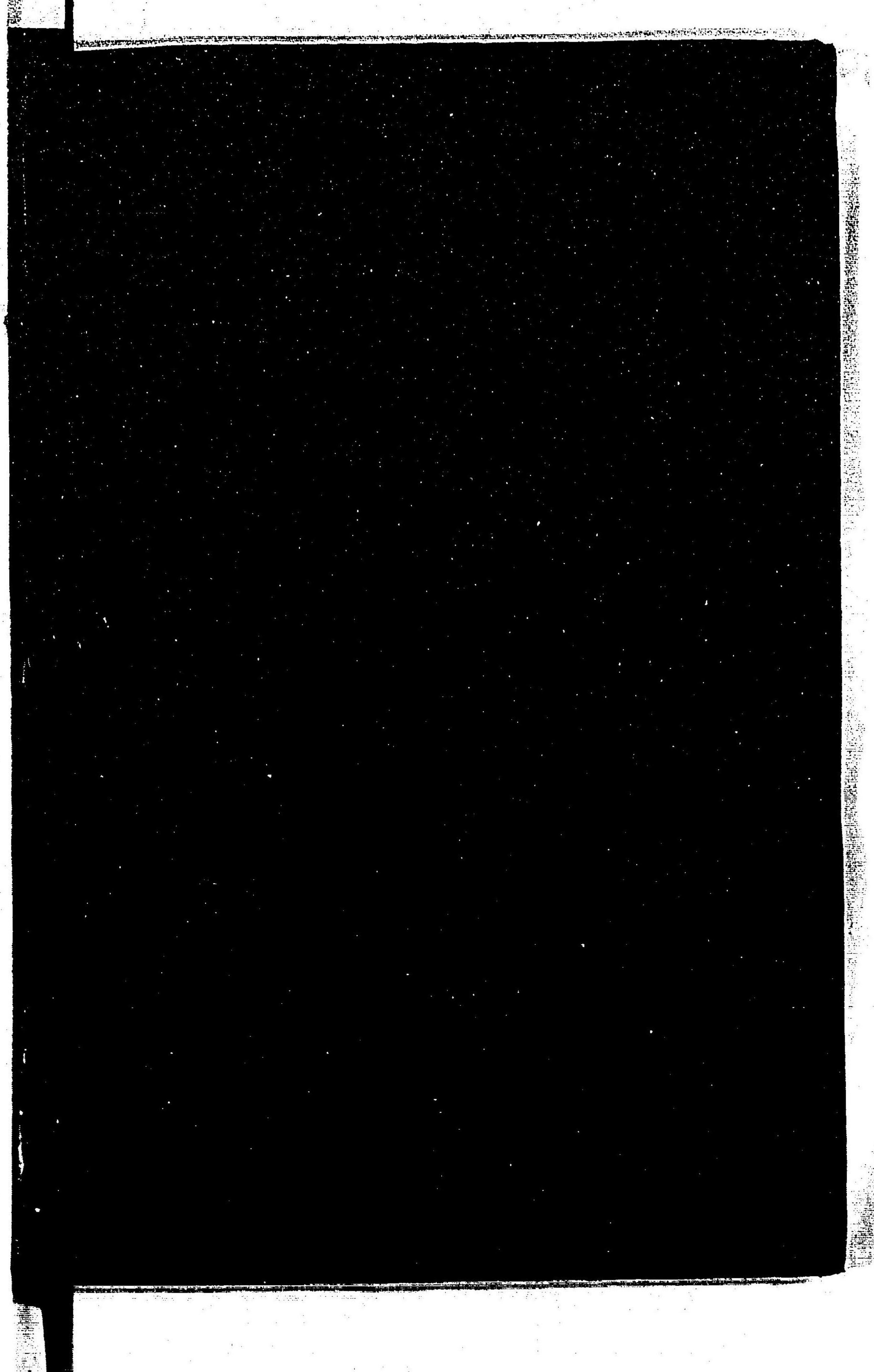
LIDDON—The First Five Minutes after Death. Translated by Rev. O. Shimada. Price .05. Postage .02

定價金 五錢
郵税金 貳錢



81

330
7





020331-000-8

330-7

神と人との人格論

ジェー・アール・イリングウォース/著

M43

ABI-0137



